

三浦半島南帯南部の地形と土地利用

大江 和子

三浦半島の地形と土地利用の調査に当って、武山断層以南の南帯をフィールドとし、記載に当っては更にこの地域を南北に分け、その中の南部を私が担当した。

航空写真の判読に基いて地形区分を行った結果、台地、斜面地、谷底平地、海岸平地の四地形面が区分された。

台地は一般に低平な隆起海蝕台であり、侵蝕を受けた基盤の上に一枚にロームを被っている。この台地上の等高線について谷埋め作業を行い台地の原面を復活してみると、台地は高位面（H面）、中位面（M面）、低位面（L面）の3面より成り、隆起が3回に亘って行われた事が分る。又この台地は相当曲折を受けた後、洪積世末期頃沈水し、半島西南部のきわめて屈曲に富む海岸線がこの時に形成されている。露頭観察の結果から台地の生成とロームの降灰との関係を調べてみると、H面隆起後に多摩ローム又はこれを下末吉ロームとの同位のロームの降灰があり、M面隆起後には下末吉ロームが、又L面隆起後には武蔵野ロームが降っている事が分る。立川ロームは何れの露頭からも発見する事ができなかった。

谷底平地は、初声を除けばこの台地上を小規模に刻んだ侵蝕谷で谷戸といわれる。斜面地は台地と谷底平地との中間に位する谷壁斜面地であつてこの地域に最も広く分布し、引橋附近では丘陵性を帯びている。海岸平地は侵蝕谷によらない平地で、高位面と低位面の2面に区分される。前者は比高5m～10mの低い段丘で現在海岸集落の載っている砂丘であり、後者は未発達砂浜である。以下、各地形面の土地利用の有様について簡単に述べる。

台地の8割近くは畑であつてその殆んどがろ毛作畑であり、三浦大根やほうれん草を特産物として産する他、栽培作物は、かんらん、花やさい、馬鈴薯、すいか、とまと、きゅうり等多様である。即ちこの地域は主として京浜市場への豊かな蔬菜供給源となつているのである。出荷形態としては共同出荷と個人出荷の両方が採用されている。この台地上の畑には夏の旱害、9月の風害という大きな問題があるにも拘らず、冬が暖いという恵まれた気候条件がこのマイナスを補っている形となつてゐる。

斜面地では森林の占める割合が優勢である。森林中の広葉樹は新材として又針葉樹の半分位は用材として利用されている。しかし樹木は成長中に強風

によつて曲げられることが多く、用材としての利用価値は高くない。森林開拓の傾向も次第にみられるが、中でも斜面の凹地は果樹栽培地として最適である。台地と斜面地の上には農業集落が各数ヶ所ずつ存在する。

谷底平地の8割は水田と集落によつて占められる。水田はすべて1年作田であり中4割は湿田であつて反当収量は低く、専ら自家用の飯米確保のために当てられている。灌漑水は専ら溜池と天水に頼っているが、水不足はしばしば深刻である。谷底平地上の畑は一般に島畑又は根畑である。

海岸平地は高位面は集落、低位面は荒地が大部分を占める。集落は前述の低い海岸緩丘に載つており、集落立地後の隆起運動を物語っている。集落の性格としては半農半漁的であるが、漁よりはむしろ農の方に力が入れている。尚東岸では、低位面が三浦半島の内湾を串へのびる新しい海水浴場の進出地域となっている。この林に各地形面毎にそれぞれ土地利用の様子を異にしてはいるが、全体としてみると台地上の蔬菜畑がこの地域の非常に目立つ景観である。一見大いに景気良く思われるが…台地上では高度の集約輪栽株式がとられている結果、短期間に著しく多量の化学肥料が施用されている反面、地力の維持増進の方策が等閑に附されている傾向がある。その爲、蔬菜類の収量や品質が低下したり、土壌の理化学性が不良となつて営農上の問題とさえなりつつあるのである。又恵まれた自然条件に安住し切つてしまつて進取の気性に乏しい事を痛感する、この様な時に他の蔬菜地帯がより合理的な経営方式を採用して市場競争にのり出してきたならば、この地帯は敗北の憂目に会うかもしれない。「三浦半島南端を近郊農村地帯として眞に発展させる爲には、農業改良普及所や農業高校の指導者に任せつきりではなく、個々の農家がまず技術上、経営上の問題と取り組みその解決に向つて努力しなければならぬであろう」と果てしもなく拓る大根原を歩き下ら考えた事であつた。

秦野盆地南部の地形と土地利用

岡 久美子

。今回の調査目的は、地形面と土地利用の対比にある。この場合土地利用に影響を与える *factor* として地形の外に、気候、地質、地下水等をも合わせて考慮した。関東地方において、当目的に合致する地形を持つ地域として、秦野を取り上げた。これらの地域全体を調査地域にするとより合目的な調査が行えると思つたが、時間と労力の限界から、当秦野を二分しその南部を調